

アーティストックス通信

No.9 「縁結び」号



第6回静岡はがき祭りに、全国からハガキ人が集う

4/5(日)、グランシップで、第6回静岡はがき祭りが開かれました。私が参加するのは、確か5回目です。という事は第2回からの参加ってことですね。その時は、九州の石川さんという絵てがみを書かれていらっしやる方の講演でした。今でも時々はがきの交換をさせていただいています。



このハイテクの時代に、「はやこんな時代だからこそ、「はがきを書く」ということを大切にしている人たちがいます。広島の坂田先生や、古くは森信三先生が有名です。普段、はがきを通して交流している人たちが、年に1回、実際に

お会いして親交を深めましょうというのがはがき祭りで、全国各地で開催されています。

私は、藤枝のオリジン・コーポレーションの杉井さんの勧めでハガキを書くようになって、もう4年ほど経ちます。書いたり書かなかったりですが、今までトータル2500枚余り。何をやっても続かない私にしては、大したものです(つて、自分で言うなって！)私は仕事柄、たくさんの人と名刺交換をしますが、そのほとんどの人はそれっきりでした。でも、全員とまたお会いすることは不可能。であれば、せめてお礼状をと思い、ハガキを書くようになりました。

最近では、ハガキと通信が、私の分身として皆さんのところに訪問させていただいています。

ミルカ・ミルカのイチ押し!!ラテンレストラン・ピカパウ 三島市広小路駅の裏、笑栄通り商店街の中に、ラテンレストラン・ピカパウはあります。南米料理が格安で食べられます。美味しいですよ!(辛くないし)私たちミルカ・ミルカは、ここで不定期でフォルクローレライブ(という名の飲み会)をやっています。音楽好き酒好き料理好きラテン好きの方、一緒に楽しみませんか? 「ピカパウ 三島」[検索] click!



縁の大切さ

私は、ハガキを通して縁の大切さを教えていただきました。こんな私でも縁の大切さの一端に触れることができている。(私のプライベートの縁結びは・・・泣)会社を経営し営業を自分でしてみると、いただいた仕事の大切さがわかります。それが縁ある人からの紹介であればなおさらです。その人の顔をつぶしてはいけけない、紹介してよかったと言われる仕事をして返さなければという思いが強くなります。人との縁、人からの応援で会社は成り立っています。社員にとつてもそうです。以前の私のように、技術者でやっていると仕事があることが当たり前に感じるかもしれません、会社や先輩が今まで積み上げてきた信頼と努力の上で仕事はいただいています。それがなければ、どんなに素晴らしい技術者であっても、自分の力を発揮するチャンスすら与えられないことを決して忘れてはなりません。それを忘れた時、その人は傲慢になり、自分のいたるところが見えなくなり、相手の足りないところを見るようになります。

東京CL100回記念開催

4/12(日)、東京渋谷で、東京建設的な生き方を学ぶ会 100回記念講演会がありました。 「おくりびと」で本木雅弘さんに指導された、札幌納棺協会の橋畑さんをお迎えしてのパネルディスカッション



ンでした。その中のエピソードが印象的でした。お母さんが亡くなったことを知った小学生が、「お母さんと約束したから」と、こぶしをぐつと握りしめ、泣くのをこらえていた。それを見た橋畑さんは、もつとも悲しんでいるご遺族に、速やかにご遺体をお返しするのが自分の使命なのだと実感されたそうです。

5月イベント・活動予定

- 9(土)ラテンレストランピカパウ・ミニセッション兼飲み会(浜松・秋田からもゲスト登場かも?)
- 18(月)社内月例会
- 23(土)富士岡公園祭り 御殿場
- 24(日)Eそうじの会 イーリード様
- 28(木)沼津建設的な生き方を学ぶ会
- 30(土)山中湖建設的な生き方を学ぶ会 安心サービスク

6月イベント・活動予定

- 6(土)笑栄通り祭りライブ三島広小路笑栄通りラテンレストラン・ピカパウ前(水と蛸と福祉まつり連動)
- 23(火)ソフトハウス経営研究会
- 25(木)沼津建設的な生き方を学ぶ会 原

この通信は、長岡または当社員が縁をいただいた方にお送りしています。通信不要、送り先が違ふ、バックナンバー読みたいなどございましたら、下記までご連絡ください。



小才は、

縁に出合って縁に気づかず

中才は、

縁に気づいて縁を生かさず

大才は、

袖すり合った縁をも生かす

柳生家の家訓

柳生家といえは、徳川家に仕えた剣術指南役の家柄である。現在の奈良市柳生地区発祥の柳生家は、織田信長、豊臣秀吉の時代に、戦いに敗れたり罪を問われたりして次第に落ちぶれていく。しかし、徳川家康と出会い、家康の前で「無刀取り」を披露したことにより認められて、剣術指南役として再び世に出るようになる。殺人剣ではなく、人を活かす活人剣を目指した。余談であるが、無刀取りは、時代劇に見られる頭上に振り下ろされる刀を素手で受け止める「真剣白刃取り」とは別物である。刀身を素手で挟み取るのではなく、相手が刀を振り下ろす直前に懐に飛び入って、肘と首を取り、または顎を掌で打ちつつ投げを放つのだ。一旦転がしてしまえば刀を奪い取るのも容易である。

しかし、柳生家で有名な人といえは、十兵衛（じゅうべえ）の愛称で知られる柳生三厳（みつよし）くらいで、それ以外の柳生家を知っている人は少ない。また、代々剣術が本場に強くて剣術指南役として適していたのかという点も言えない。それにもかかわらず、長きにわたって柳生家が剣術指南役として活躍し、大名にとりたてられていったかという点、この家訓に基づく縁の生かす家風があったからだと思う。柳生家は、強い情報・人脈のネットワークを持ち、それを生かすことで、徳川家の動きを裏から支えた。それをせしめたのは、この家訓に基づく「人脈・チャンスを生かす」家風に他ならない。

（文・長岡 参考文献・フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より部分的に引用）